

3年目を迎えた 公認会計士「研修出向制度」の取り組み

約120名もの若手会計士が
日本を代表する企業で武者修行。
公認会計士の未来を示唆する制度

取材・文／南山武志 撮影／大平晋也

石田 正

日本CFO協会 主任研究委員
カルビー株式会社 常勤監査役／公認会計士



Profile

1972年から25年間、外資系会計事務所および大手監査法人にて日本および米国基準の会計監査、財務アドバイザリー業務に従事、代表社員。事務所在籍中に通算10年間、シンガポールおよびロンドン事務所に駐在。96年以降、日本マクドナルド代表取締役副社長(CFO)、セガサミーホールディングス専務取締役(CFO)を歴任。2010年より日本CFO協会主任研究委員、11年からカルビー常勤監査役、現在に至る。共著書「包括利益経営」(日経BP社)、「CEO・CFOのためのIFRS財務諸表の読み方」(中央経済社)。

意外とトントン拍子に事が進んだ記憶があります。

当時、J-SOX導入に伴う、企業の会計士需要が一巡したこともあって、2008年頃から会計士の「余剰」が顕著になっていました。一方、企業の側は、IFRS導入が叫ばれるなか、会計の専門家を採用したいのはやまやまだが、その術を知らなかつたのが実情です。この制度は、そんな両者を取り持つ意味で、まことに時宜を得たものだといったえます。

とはいっても、最初、「体のいい会計士のリストラではないのか」といった声が聞かれたのも事実です。そんな見方を一蹴するうえで、監査法人が躊躇なく「エース級」の人材を出向させたのは大きかったと思います。

CFO協会会員企業への谷口さんは、呼びかけに対応して、三菱商事、花王、武田薬品工業といつた日本のリーディングカンパニーが「出向受け入れ」を表明したため、「その期待に応えられる会計士を送ろう」という流れができたのです。

現在、1期～3期生合計で、新日本監査法人から約80名、あずさ監査法人と監査法人トーマ

ツから、それぞれ約20名ずつ計120名ほどが、この制度を使って出向中です。

さらに新日本監査法人からの出向者の場合、出向先企業でのOJT(オン・ザ・ジョブトレーニング)に加え、実務の専門家などによる1年間の研修を受講することができます。財務会計分野だけでなく、CFOとして求められる多様な知識や経験とはどういうものなのかを学んでもらうのが目的です。

定期研修制度のカリキュラムは企業会計(財務、管理および税務会計)、経営財務(資金調達、運用および企業買収)、コンピュートガバナンス(企業統治、企業法務およびIR)の3本柱からなり、ほかにコミュニ

ケーションやプレゼンテーションスキルをアップさせるための講座も設けています。

参加は強制ではなく任意で、当初は月に2回、夕方6時半スタートで講座を組みました。ただ、これだと業務の関係で出席できない人が多くいることがわかり、昨年7月にスタートした3期生からは、出向先の協力を得て9月、翌年3月、6月に2日間ずつ、集中講義を行う方式に改めつつあります。

このように、実態を踏まえて柔軟に制度の改善を図ってきたことも、ここまで順調にこれらた一因だと思っています。

もう一つ特筆すべきは「蓼科会議」と称する特別研修です。定期研修が終わった夏に蓼科の会議場で開催される蓼科会議は、実務の「生きた数字」を扱う仕事をある種のシヨックも覚えつつ、やりがいを感じて仕事をしているようです。受け入れた企業の評判も上々で、「3年が過ぎたらもういらない」という会社は、私の知る限りありません。

監査法人にも、事業会社を知り、幅広い経理・財務のセンスを育んだ人材が戻ることで、從来なかつた知識やスキルが法人内に持ち込まれ組織の活性化につながることが期待されます。

日本企業がグローバル化を加速させ、変身を急ぐ時代にあって、

う考えと、私が常々抱いていた問題意識は完全に一致しました。私は1990年から6年間、アーンストアンドヤング(AY)とアーサー・アンダーセン(AA)のロンドンに駐在し、ヨーロッパの日系企業担当部門の統括責任者を経験しています。そこでかいしま見た英国の会計士の働き方は、日本とはあまりにかけ離れたものでした。

大学を卒業し、会計事務所に入った新人は、3年間いわゆる「靴持ち」をしながら徹底的に事務所での教育を受けた後、「勅許会計士」の試験を受けます。有名大学の出身者ですので試験にはほぼ全員が合格します

が、そのまま事務所に残るのは半数程度。そして残りの半数は、その時点で一般事業会社などに転職していきます。だからどの企業の経理にも多くの会計士が在籍し、活躍しているのです。96年、私はロンドンから日本に戻って、日本マクドナルドのCFO(最高財務責任者)に就きましたが、日本では事業会社で働く会計士は稀なことに気づきました。会計士が監査法人に

しかいないという現状は、私の目に異常に映つたのです。谷口さんのアイデアにわが意を得た私は、新日本監査法人の副理事長(当時)だった小島秀雄さんに話をつないだのですが、



写真は毎年夏に蓼科で行われる「蓼科会議」の模様